

JIS 原案作成活動

1. 色名から用語まで

色に関する日本工業規格は、JIS Z 8701-1952 (色の表示方法) に始まったが、当会が直接最初に原案を作成した JIS は Z 8102-1957 (色名) である。

その原案作成委員会は、当時の山内二郎会長を委員長として、昭和30年10月から31年6月まで関東部会9回、同小委員会2回、関西部会9回、合同委員会1回を開催しているが、その成案は当会の創立当初から練り上げたものであった。

昭和23年8月7日の関東支部第3回例会において発足が定められた用語研究会(尾本義一委員長ほか5名)は、工業に用いる日本の標準的な色名をまず定めようとするものであった。その審議の結果は関西支部でも討論されて、標準色名法と名付けられた。

その内容は今日の JIS 色名の一般色名とほとんど同じでやや単純なものであった。この色名の中心的な色票が村上静男氏らによって製作され、昭和26年に色彩科学協会編、日本電子測器(株)出版“標準色名”が刊行された。

このような下地の上に発足した前記の原案作成委員会も、系統的な一般色名と歴史的・慣用的な色名とをどう共存させるかについて論議百出したようである。その結果の答申案には、一般色名の中にピンク、茶色、オリーブも加えられていたが、その後の審議でこれらはまた慣用色名の中の最優先のものに改められた。

次の昭和31年度には色の標準の JIS 原案作成委託を受けて、当会の原則として毎年1件の JIS 原案作成を行なう慣例ができた。この審議過程でむしろ三属性による色の表示方法を規定し、その中に色票に対する条件も含める方が良く結論されて、JIS Z 8721-1957(色の三属性による表示方法)となった。この JIS が能率良くまとめられた基盤には、前記用語研究会と共に発足したマンセル研究会(山内委員長ほか5名)の成果があったことは疑いない。

32年度には色用語の原案作成に取り掛かった。色彩のような境界領域の専門用語を短期間にまとめることはもともと困難であるが、広瀬誠一委員長、東莞、日置隆一両幹事をはじめとするキーメンバーはこの難問にまどもに取組んだ。しかも対応外国語に英、米、独、仏語をそろえることまで試みた。結局、初年度は“色に関する用語(一般)”として答申し、次の33年度に改めて“色に関する用語(心理・生理)”として原案作成を受託して追加分を作成した。

さらにその後専門委員会で2年間を掛けてその両者をまとめて練り直した。お蔭で、でき上がった JIS Z 8105-1961(色に関する用語)は他の用語 JIS の見本ともな

るようなものになった。

用語委員会では基本的概念から表記法まで色々なことが論じられた。今でも蒸し返されることに「フィルター」等の末尾の長音符を付けるか否かということがある。物理、化学等の理学系と、工学系の中でも応用化学部門等では「フィルター」と書くが、工学系の電気、機械部門では、かな2文字を越える末尾のア列音(er, or 等)には原則として長音符を用いない習慣があって、「メータ」、「モータ」等と書く。この場合の ter や tor は、日本語の「ター」のように長くはなく、どちらかと言えば「タ」に近いという論もあった。

これに対して広瀬委員長は明確な意見を持ち、日本語には中途半端な長さの音節はなく、長音は2音節分の長さであることを俳句や短歌を例として説明した。また「フィルタ」と書く場合の「タ」は短音として読むべきで、「タァ」などと長音化して読むではいけないと主張した。このようなことから色用語ではフィルター、カラーに統一された。

2. 拡充の時代

色用語の原案が作成された時には、既に色の表示方法の見直し改正が行なわれて、JIS Z 8701-1958(色のXYZ系による表示方法)となり、JIS Z 8722-1959(物体色の測定方法)も制定されていた。また保安用品協会の原案作成委員会(東莞委員長)による安全色彩関係の JIS Z 9101-1953(安全色彩使用通則)他3件の JIS も制定されていた。従ってその後の JIS 原案作成は、それまでの基本 JIS を拡充する方向に進んだ。

以下にその時代の原案作成の年度と原案名(改正原案の場合は改正前の JIS 番号)に制定された JIS 番号(表題)を列記する。

34年度、色の比較方法、Z 8723-1961(表面色の比較方法)。

35年度、光の色の測定方法、Z 8724-1962(光源色の測定方法)。

37年度、色温度の測定方法、Z 8725-1966(光源の分布温度および色温度の測定方法)。

38年度、蛍光色の分光測色方法、(未定)。

39年度、10度視野における色の XYZ 系による表示方法、Z 8728-1971(10度視野 XYZ 系による色の表示方法)。

40年度、10度視野における物体色の測定方法、Z 8727-1971(10度視野 XYZ 系による物体色の測定方法)。

40年度、UVW 系による色の表示方法、Z 8729-1970(U*V*W* 系による物体色の表示方法)。

41年度、色差表示方法、Z 8730-1970(色差表示方法)。

42年度、測色用の標準の光、Z 8720-1973 (測色用の標準の光及び標準光源)。

44年度、Z 8105-1964改正、Z 8105-1982 (色に関する用語)。

44年度、Z 8102-1961改正、(未定)。

44年度、白色度表示方法 (未定)。

これらの原案作成委員会は総て日置隆一委員長を中心にして進められた。これだけの規格ネットワークを完成して、色彩科学協会として色に関する JIS 講習会 (別項参照) が主催できるまでの実績を蓄積した。

しかし一方 JIS 原案は答申したものの JIS 化が著るしく遅れるものがでてきた。色用語改正案のように、昭和54年度に再編成された日本工業標準調査会色彩専門委員会 (川上委員長) による3年間の審議の結果、JIS 化が完成したものもあり、今日まで JIS 化されていないものもある。

3. 見直しの活発化

当会が日本色彩学会に改称発展した後の数年間は上記の一段落したという状況から、JIS 原案作成は休眠期間になってしまった。その間光電色彩計調査委員会が「光電色彩計学会基準案」を作成したほか、白色度調査委員会や蛍光色調査委員会でも JIS 化に備えた調査研究が行なわれたが、成文化した報告にはなっていない。

一方 CIE では従来の勧告を整理しまとめて出版物 No.15(1971) として出版し、新しい均等色空間の勧告 (1976) 等もあって、JIS の国際規格からのずれを憂慮する声が当会内にも生じてきた。そこで昭和52年度に JIS 色差測定方法検討委員会 (馬場護郎委員長) が組織され、その中で JIS 原案作成活動の再開、特に当面改

正が必要な色差関係の JIS の改正方向を定めた。

これによって53年度から次のような改正原案作成が活発に行なわれた。

53年度、Z 8729-1970改正、Z 8729-1980($L^*a^*b^*$ 表色系及び $L^*u^*v^*$ 表色系による物体色の表示方法)。

53年度、Z 8730-1970改正、Z 8730-1980 (色差表示方法)。

54年度、Z 8722-1971 及び Z 8727-1971 合併改正、Z 8722-1982 (物体色の測定方法)。

55年度、Z 8701-1971 及び Z 8728-1971 合併改正、Z 8701-1982(XYZ 表色系及び $X_{10}Y_{10}Z_{10}$ 表色系による色の表示方法)。

56年度、Z 8724-1966改正、Z 8724-1983 (光源色の測定方法)。

57年度、Z 8720-1973改正、(規格票印刷中)。

58年度、条件等色度の評価方法 (新規)、(審議完)。

以上の原案作成委員会の委員長は筆者 (森) が務めたが、委員会内に小委員会を設けて審議の効率化を試みた。それぞれまとまった成果が得られたのには小委員会委員長の企画、実行力によるところが大きかった。各年度の同委員長のお名前を記して感謝する。53, 54, 55年度: 馬場護郎, 56年度: 木滑寛治, 57, 58年度: 大田登。また53年度以降の原案には総て専門委員会の審議省略という方式がとられているので原案作成から JIS 制定までの日時が短縮された。一方 JIS 解説の原稿についても原案作成委員会に責任があることになった。これについては積極的に解説を付けることとし、毎回上記の小委員長が中心になって有益な原稿をまとめていただいている。

(森 礼於 株式会社東芝総合研究所)

上記の JIS について現在発行されているものを番号順に記す。

JIS Z 8102-1961 色名

JIS Z 8105-1982 色に関する用語 (解)

JIS Z 8701-1982 XYZ 表色系及び $X_{10}Y_{10}Z_{10}$ 表色系による色の表示方法 (解)

JIS Z 8720-1973 測色用の標準の光及び標準光源† (解)

JIS Z 8721-1977 三属性による色の表示方法

JIS Z 8722-1982 物体色の測定方法 (解)

JIS Z 8723-1961 表面色の比較方法

JIS Z 8724-1983 光源色の測定方法 (解)

JIS Z 8725-1976 光源の分布温度及び色温度の測定方法

JIS Z 8729-1980 $L^*a^*b^*$ 表色系及び $L^*u^*v^*$ 表色系による物体色の表示方法 (解)

JIS Z 8730-1980 色差表示方法 (解)

((解) は解説つき)

(† 印のものは、現在印刷中)

以上が日本色彩学会が原案作成した JIS である。

なお、これ以外の色に関する JIS については、日本色彩学会 編「新編 色彩科学ハンドブック」東京大学出版会 発行 (昭和55年) または日本規格協会 編「JIS ハンドブック 色彩」日本規格協会 発行 (1983年) をご参照下さい。 (編集委員会)